

新渡戸稲造の農業思想

—ドイツ歴史学派の影響とクエーカーリズム—

谷口 稔（横浜国立大学・院）

はじめに

新渡戸稲造（1862—1933）は教育、思想、植民政策等、幅広い分野に渡って活躍した人物であるが、本報告は、新渡戸の農業思想の形成にドイツ歴史学派の影響があり、彼の信仰（クエーカーリズム）が反映していることを示すものである。

新渡戸は農学を志して札幌農学校に学び、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学を経て、ドイツで学位論文『日本土地制度論』（1890年）を提出している。帰国後、札幌農学校の教授の任を経て書かれたのが、新渡戸の代表的著作『農業本論』である。1898年（改訂版は1908年）に出版された『農業本論』は、近代日本において、社会科学的観点から農業を見つめた初期の著作であった。出版時、農学分野に限らず幅広い読者層の関心を集めたためベストセラーとなり、その後、農山漁村文化協会編『明治大正農政経済名著集』の第7巻（1976年）に収められている。

新渡戸を論ずる場合、『武士道』『修養』等の著作を、新渡戸の信仰（クエーカーリズム）を起点とした人格論に焦点を当てるアプローチが多い。それに対して、『農業本論』等、新渡戸の農学に関する著作について、新渡戸研究者はほとんど触れてこなかった。その理由として考えられるのは、農業という特殊領域の分野であることに加え、『農業本論』が難解な書であることもその一因と思われる。それゆえ、『農業本論』に関する論評は、札幌農学校の新渡戸の後継者を除けば、新渡戸研究者以外からなされる傾向にあった。刊行当時には好意的あるいは批判的な書評が錯綜し、たとえば徳富蘇峰が「寛容博厚の精神的調子を以て満たされている」と賞賛し、横井時敬は「新渡戸の農学は単なる寄せ集めであり、非実学的」、河上肇は「新渡戸の貴農説は重農主義」と批判している。時代は下るが、東畑精一は「『農業本論』は読む者をして農学に志さんと追い立てる」と肯定的評価をしている。全体的には、新渡戸の『農業本論』は、「常識的ではあるが中途半端」といった印象を持たれているようである。それは、具体的政策、例えば、北海道への植民、小作問題等が論じられておらず、横井時敬の唱える「小農主義」に匹敵するスローガンも見受けられないため、漠然とした印象を与えるからであろう。新渡戸は当初『農政』の本を書く予定であり、したがって、『農業本論』はその前提となる本であったが、諸事情により『農政』の本は書かれずに終わった。中途半端という批判は、この本が「農政前提」という限定的な位置づけのもとで書かれたことに起因するものでもある。

本報告は、前半部で、ドイツ留学時に書かれた『日本土地制度論』に着目して、新渡戸が日本の農業政策をどのように理解していたか、及びドイツ歴史学派の影響がどのような点に認められるかを考察する。『農業本論』を対象とする後半部では、新渡戸の農業思想が彼の信仰（クエーカーリズム）と関係していることを指摘し、その「貴農論」を単なる産業理解としてではなく、人類全体の視点で農業を理解しようとした新渡戸の思想の現われとして捉えようとするものである。

1. 『日本土地制度論』に見る新渡戸の農業理解

新渡戸は1887年から1890年まで、ドイツのボン、ベルリン、ハレの3つの大学に順次留学し、コンラッド¹⁾指導の下で書きあげた学位論文が『日本土地制度論』である。ドイツ語で書かれ、ベルリンで出版されている。第I部と第II部に分かれ、第I部 歴史的展望 第II部 現代の土地所有における配分および利用状況から構成されている。新渡戸の学問的研究態度にはドイツ歴史学派の強い影響が窺われ、あくまでも実証研究が中心で、統計を多く引用している。『日本土地制度論』は、古代から1880年代までの日本の土地制度に焦点を当てて論じたものであるが、ここでは明治以降に限定して考察する。

新渡戸は明治政府の一連の農業政策をめぐって、「中世以降、農民ははじめて、自らの大地を耕し、今や彼らはそれを思いのままにすることができた」と述べ、日本の農民を解放したという側面があると見ている。しかし、1873年の地租改正による金納化、1875年の地所の分割制限の廃止が惹き起こした問題点も指摘している。金納化に関しては、農民が生活資金を得るために、収穫した米をできるだけ早く売ろうとし、自ら価格の低落を作り出しているとしている。地所の分割は零細化を招き、より一層貧困の問題が生じることを懸念している。そして次の引用文に見られるように、解放された農民の問題点として、倫理観が十分に育っていないことを指摘した。

「日本の農民は、従属していた立場から、急に自立した状況にあげられたことによって混乱し、夢にも思わなかった自由に眩惑されて、農民の多くは軽率に借金をし、その結果与えられた土地さえ失うことになった。このようにして土地所有者は再び小作に転落した」

『日本土地制度論』新渡戸稲造全集第21巻56頁

このように明治政府の農業政策を「農民解放」という見地から評価しつつも、農民の実態の暗黒面に光をあて、将来的展望をもって改善がなされるべきであるというのが『日本土地制度論』で示された見地であった。

新渡戸はベルリン大学でシュモラー²⁾から農業史を学び、彼の自宅にも数回

招かれて、その人格的感化を受けている。シュモラーは当時、社会政策学会の中心的存在であり、東エルベ地域の遅れた農村を近代的農業に転換させることに力を注ぎ、ユンカーの広すぎる土地と劣悪な農業労働者の状態が問題であると捉えていた。そして、その改善には、知性に富んだ合理的農場主の存在と、農業労働者の人間変革が必要と指摘した。具体的政策としては、封建的紐帯からの解放と植民による小所有化を提案していた。農民の側からの「自助」の運動が無い場合、国家の手による社会変革の端緒が創出されるべきとの考えであった。新渡戸はドイツ留学中、東エルベ地方を訪れている。当時の東エルベの状況と北海道の状況は、類似点が存在すると思われる。東エルベ地方で行われた政策が、北海道にあてはまるかどうかを新渡戸が考えたことは十分想像される。シュモラーの提起した課題、広く言えば、ドイツ歴史学派が抱えていた課題を、新渡戸は日本にも適用したのではないだろうか。日本の課題は、耕地面積の狭さであり、当時、1家族平均して0.8町を耕していたが、2町(約2ha)の耕地が、最も合理的に耕作できる広さだと新渡戸は述べている。零細農の存在についての解決策としては、牧畜の奨励、未開墾地の開拓、そして、北海道への植民を挙げている。北海道への植民の部分は、シュモラーの政策、——ユンカーが自分の土地を3~5モルゲン(1モルゲン=0.25ha)を分割地として売り出し、小所有者を創出していく——と類似している。実際、『日本土地制度論』の最後は、次の文で結ばれている。

「北海道こそ、農業問題の具体的解決への途を示してくれる。ここにはいまだ誰も思い浮かべなかった未利用の力が眠っている。そこへすぐに生活の備えのない多数の人々が群れをなして移入し、新しい故郷と新しい共同体を作るだろう。これこそが未来の国であり、そこに私どもの問題の具体的解決がある」

なお、学位論文の続編として、プロイセンにおける国内植民を参考にして、北海道の開墾と植民について書かれる予定であったが、未完に終わった。

2. 『農業本論』の特色

新渡戸は1891年に帰国後、札幌農学校教授になり、当時、存続が危ぶまれていた札幌農学校の立て直しに数年間尽力するのであるが、あまりの激務のために健康を害し、離職する。その後、健康の回復を待ちながら、口述筆記により書かれたのが『農業本論』である。『日本土地制度論』執筆時より約8年の時間的間隔があるが、その間、新渡戸は農学校教授として日本の農業をつぶさに観察し、日本の産業の向かうべき方向を考えていた。その新渡戸の農業思想の集大成とも言えるものが『農業本論』であった。1章、農業の定義から始ま

り、2章、農学の範囲、3章、農業に於ける学理の応用、4章、農業の分類などの学理的な問題を扱った章と、5章、農業と国民の衛生、6章、農業と人口、7章、農業と風俗人情、8章、農民と政治思想、9章、農業と地文、そして、最終章(10章)の農業の貴重なる所以とから構成されている。以下、『農業本論』の中から3つの点に絞って論じる。

(1) 「貴農論」

新渡戸の「農業が貴重である」との考えは、『農業本論』の最終章にある次の文にその真意がこめられている。

「内に農の力を籍らずして外に商工によりてのみ勇飛せんとするは、恰も鳥が樹木岩石等の間に一定の巢を構ふることなくして、渺茫たる海洋をば、唯、其両翼によりて飛翔するが如きのみ」

「農は万年を寿ぐ亀の如く、商工は千歳を祝ふ鶴に類す。即ち一は一定地にありて、堅く永く守り、一は広く且つ高く翔って、其勢力を示すものなり。故に此両者は相俟って、始めて完全なる経済の発達を見るべく、而して後、理想的国家の隆盛を来すべきなり」

新渡戸は、農業、工業、商業はあくまでも調和を保つべきと考えており、江戸時代の荻生徂徠らに見られた重農主義的立場とは一線を画している。新渡戸の表現から、農工商鼎立論という言葉も出てくるが、農の進化のスピードは遅く、また、収益も商工ほどあげられないという制約の中にあっても、なお、農業が基本という新渡戸の説は傾聴に値すると思われる。

(2) 疎居と密居

「各自の畑の中に各自の家があり、集落を形成しないで人が住む散居制に比べて、村を作り密居して住む密居制の方が社会のあり方として望ましい。こうした方法によって、自分の地域の中で強い人間関係を作り上げていくことが人間にとって大切なことだ」と新渡戸は指摘している。新渡戸は疎居と密居の双方に利点を認めつつ、密居の側に立っている。機械を共同利用する時代には、密居は不可欠であり、農村の将来にとって展望が持てると考えていた。これは生活面、実用面だけでなく、社交主義(sociality)の精神にも繋がるものと新渡戸は見えていたと思われる。

(3) 新渡戸の労働観・人間観

新渡戸は農業労働が何にもまさって貴重なものだという価値観を持っていた。新渡戸の理想とする農民像は、「食を給するために働き、靈魂の糧を与えることのできる姿」すなわちキリストの姿であった。新渡戸は「農」という語について、土地と労働との2つの要素が重要であると見ていた。この点について「土地は客の如く、労働は主の如し」と『農業本論』に書いている。

3. 新渡戸の思想

新渡戸が農業を基本と考える背景として、クエーカーリズムという思想基盤があると思われる。新渡戸は自然の中に神を見出し、自然を通して神の働きを感じた人物であった。『農業本論』の序において、以下のジョン・ホイッティア（1807～92）の英詩が掲載されているが、ホイッティアは自然を賛美するクエーカー教徒であった。

Give fools gold, and knaves their power!
Let fortune's bubble rise and fall;
Who sows a field, or trains a flower,
Or plant a tree, is more than all.

(Whittier)

クエーカーは、「内なる光」を重視する派である。新渡戸はどの民族にも「内なる光」が与えられており、これを十分に活用することが人生を切り開いていくことにつながると考えていた。新渡戸は札幌農学校教授時代の1894年に、『ウィリアム・ペン伝』を著しているが、ウィリアム・ペンは各人の人生において「内なる光」を活用すべしと強調した人物であった。『農業本論』の中に示された日本の農民に対する厳しい叱声は、農民層の間では「内なる光」の発揮が不十分であり、「西洋流の自立した人間こそが社会を発展するための不可欠の要件」であると新渡戸が考えていたからに他ならない。

後に新渡戸は、宇宙意識（Cosmic Consciousness）を唱えている。この意識は、偏在する生の拍動を心に感じ、大宇宙と一体となるという高次の段階であって、東洋哲学にいう個と全の合一の次元に相当するものである。ここにあっては、自己の霊は宇宙の霊と冥合合一し、自然の万物と心を同じくする。このような自然との合一、宇宙との冥合が、新渡戸の世界にはあった。

新渡戸は、人は生きていく上で神との垂直な関係（vertical relationship）と同時に人間同士の水平的関係（horizontal relationship）が重要であることを強調した。第一高等学校校長時代に社交主義を主張したが、これは後者に関係している。その当時の一高生は籠城主義に陥っていたが、新しい時代は、社交性を以て人と接することが必要だと見ていたのである。

新渡戸は晩年、協同組合主義を唱えたが、これは社交主義の行き着く所であったとも考えられる。新渡戸は、晩年、自己犠牲ということを強調したが、自分が損をしても他を助けるという人がいなければ、協同組合主義は成立しないと述べている。その協同組合論は、「内なる光」「自己犠牲」などの精神的基盤のフィールドで論じられている。このような高き精神性に到達して、新渡戸は

この世の生を終えたのであった。

おわりに

新渡戸の農業思想は、ドイツ歴史学派の影響を強く受けており、特にシュモラーと接触した点は大きかったと思われる。両者に共通するのは、いかに農民を自立させるかという点であった。シュモラーはユンカー、農業労働者双方の意識改革を求め、広すぎる土地を分割して貸し出し、農民たちに協同組合を結成して自治を促すなどの政策を提案した。他方、新渡戸も貧農の原因となる狭すぎる耕地からの脱却を考えていた。そのためには、工業、商業の発展により、農業人口が他産業へ流出し、その結果、一人当たりの耕地面積の拡大につながるという考えを持っていた。精神面では、農民の意識の改革を促し、自立した農民を形成していくことが農業の発展につながると見ていた。新渡戸も晩年、協同組合主義を唱えているが、この点もシュモラーと類似している。

『農業本論』には、新渡戸の人生観、世界観がその中に見受けられる。その背後にはクエーカリズムがあり、神の声に耳を傾け、大地（自然）を耕すこと、そのこと自体が新渡戸にとっては宗教性を帯びた行為であった。農民の品性を語り、農村の風俗人情を論じ、農業の貴重なる所以を説く時、新渡戸の心の奥底にあるものは他ならぬキリスト教的理想主義と愛と人格主義であった。

現在、日本の農業が衰退し、市場経済という資本主義原理に基づいた農業が世界を席卷しているが、明治期の農政論やそれを背後で支えたドイツ歴史学派の社会政策学を再評価することも必要なのではないかという声も聞かれる。現代は、新渡戸の『農業本論』の「貴農論」に耳を傾け、農業の占めるべき位置について再考することが求められている時代なのかもしれない。そして、新渡戸の自然に働きかけて主体的に生きようとする精神性に学ぶことも閉塞状況にある現代を生き抜いていく一つの道であると思われる。

註)

- 1) コンラッド (Johannes Conrad, 1839~1915) 西プロイセンのボルカウ生まれ。1872年から91年までハレ大学教授。レクシスと共に『国家学大辞典』を編纂した。新渡戸は1889年4月からハレ大学で、コンラッドから農業経済学と統計学を学んだ。
- 2) シュモラー (Gustav von Schmoller, 1838~1910) 西南ドイツのハイルブロン生まれ。ハレ、シュトラスブルク、ベルリンで教授を歴任。新渡戸は1888年10月からベルリン大学で、シュモラーから農業史を学んだ。